

## 張家山漢簡『算数書』の用語と秦漢期の社会

Technical terms in “Suanshu-shu” of the Zhangjiaoshan and Chinese society  
of Qin-Han period

大川 俊隆 (OHKAWA Toshitaka)

本研究の重点は、張家山漢簡『算数書』の中に見られる数学的専門用語と、『算数書』の中に反映している秦漢期の用語・文字の意味を読み解くことにあった。一年間という時間的制限の下で、『算数書』の中に現れるすべての用語について研究を進めかつ終えることはできなかったが、その中の一部の用語・文字について、その独特の用義や意味を探ることができた。

なお、本研究員は、本研究課題の研究の前提として、

「張家山漢簡『算数書』の文字・用語について」(1) 『大阪産業大学論集 人文科学編』  
118号 (2006年2月)

を執筆している。

本研究の期間、即ち平成18年度中に本研究員が発表した論考は以下の通りである。

- 1) 張家山漢簡『算数書』中の「從」字について 『中国学の十字路—加地伸行博士古稀記念論集』 (2006年4月)
- 2) 張家山漢簡『算数書』の文字・用語について(2) 『大阪産業大学論集 人文科学編』  
121号 (2007年2月)

1)は、『算数書』中に見える「從」字が、「加える」「あわせる」という義で用いられていることに対して考察を行ったもの。この考察の結果、この「從」字は、大きい数量に小さい数量を「加える」場合や、主となるべきものに従なるものを「加える」場合に用いられている用語であり、「并」字や「合」字の義と区別的に用いられていることが知られた。この文字は、『算数書』より『九章算術』の時代までは用いられていたが、それ以後には、中国数学史の中では「加」や「合」の字の中に吸収され、用いられなくなり、以来この『算数書』の発見まで、このような用法は知られることがなかった。

2)は、『算数書』中の、「徑分」という語や「道」「圓」の文字に対して考察をなしたもの。

「徑分」の「徑」字の義は、『算数書』の他の「徑」字や、張家山漢簡の『二年律令』中の「徑」字の用義から、「近道」の義であることが知られ、そこから「徑分」とは、「分け方の近道」、即ち「早分け法」の意であることが知られた。この「早分け法」という計算術は、すでに『九章算術』の中の計算術には見られなくなっている。

「道」字は、『算数書』のなかでは、本義の「道路」の義ではなく、「一より」という介詞として用いられているが、この用義は、張家山漢簡のほか、他の出土文字資料の中でも見られ、さらに、秦代より漢代に編纂が行われたと考えられる伝世の書籍中にもしばしば見られるものである。恐らく、『算数書』編纂の時代には、社会的に常用されていた用法であろう。しかし、後代、このような用法はほとんど見られなくなる。

「圓」は、『算数書』では円形を表す語であるが、『九章算術』を含む後世の数学文献ではほとんど「圓」に代わってしまう。「圓」字と「圓」字の成り立ちより、両字が漢代に並用して用いられていたこと、やがて劉徽が『九章算術』に注を加えた段階では、「圓」が「圓」に代えられたという事実をあきらかにした。

これらの、用語や文字に対する研究の成果は、2006年10月に刊行された、『張家山漢簡『算数書』—中国最古の数学書—』の中にも反映されている。